

No. 325【2018年9月28日配信】
遺跡から発見される「土坑墓」(担当:児玉)

こんにちは。文化財課の児玉です。縄文時代の遺跡を発掘調査すると、縄文人が掘った直径1m前後の穴の痕跡を確認することができます。考古学では、このような遺構を「土坑^{どこう}」と呼び、主に食料を貯蔵するための穴の場合には「貯蔵穴」、墓穴の場合には「土坑墓」などに分類されます。

先日、小牧野遺跡の解説スタッフから、遺跡から発見される「土坑墓」について、「人骨が残っていないのに、どうして墓だとわかるのか？」という質問を受けました。

リン酸カルシウムを主成分とする骨は、「酸」に溶けやすい性質であり、酸性土壌が多い日本列島の遺跡では、数千年もの間に溶けてしまい骨が残らないケースがむしろ一般的です。このため人骨が検出される例としては、酸性土壌を中和する炭酸カルシウム成分を滲みだす「貝塚」や酸性土壌と接しない土器棺(人骨収納用の大型の土器)の中などです。

日本各地の遺跡及びその展示施設を巡ると、遺跡を紹介する展示やパンフレットなどには「土坑墓○基、貯蔵穴○基、…」といった記載をよく見かけますが、これはあくまでも考古学の分類上の用語であり、土坑墓として判定されたものの中には、実際には墓ではないものも含まれている可能性があります。

それでは、どのようにして「土坑」を土坑墓や貯蔵穴などに分類するのかというと、基本的には発掘調査で土坑を半分に断ち割った際の土層断面を観察して判別します。

土坑の土層は、大きく二つのパターンがあり、一つは何層にも土が重なって堆積するパターンで、周囲の土砂が雨水のはたらきによって流れ込み、長い年月をかけて埋没したことを示すもので、元々、土坑の内部が空洞の状態であったことがわかります。こうした堆積パターンは「自然堆積」と呼ばれ、土坑の断面形が理科実験用のフラスコのような形を呈するものは「貯蔵穴」として分類されます。

もう一つのパターンは、土層の重なりが層にならず、一括して埋め戻されたような状況を示すものです。こうした堆積パターンは、「人為堆積」と呼ばれ、縄文人が穴を掘ったあとで、比較的短期間で土を埋め戻した痕跡と理解されます。この堆積パターンのうち、遺体が入るほどの大きさや深さの場合には「土坑墓」として分類されることが多いです。実際に、人骨を検出した土坑墓と同じような土層になっています。

さらに、副葬品と考えられる玉類などの遺物が出土すると、ますます墓としての確度が高まるのですが、そうした事例もまた少ないのです。



小牧野遺跡の土坑墓